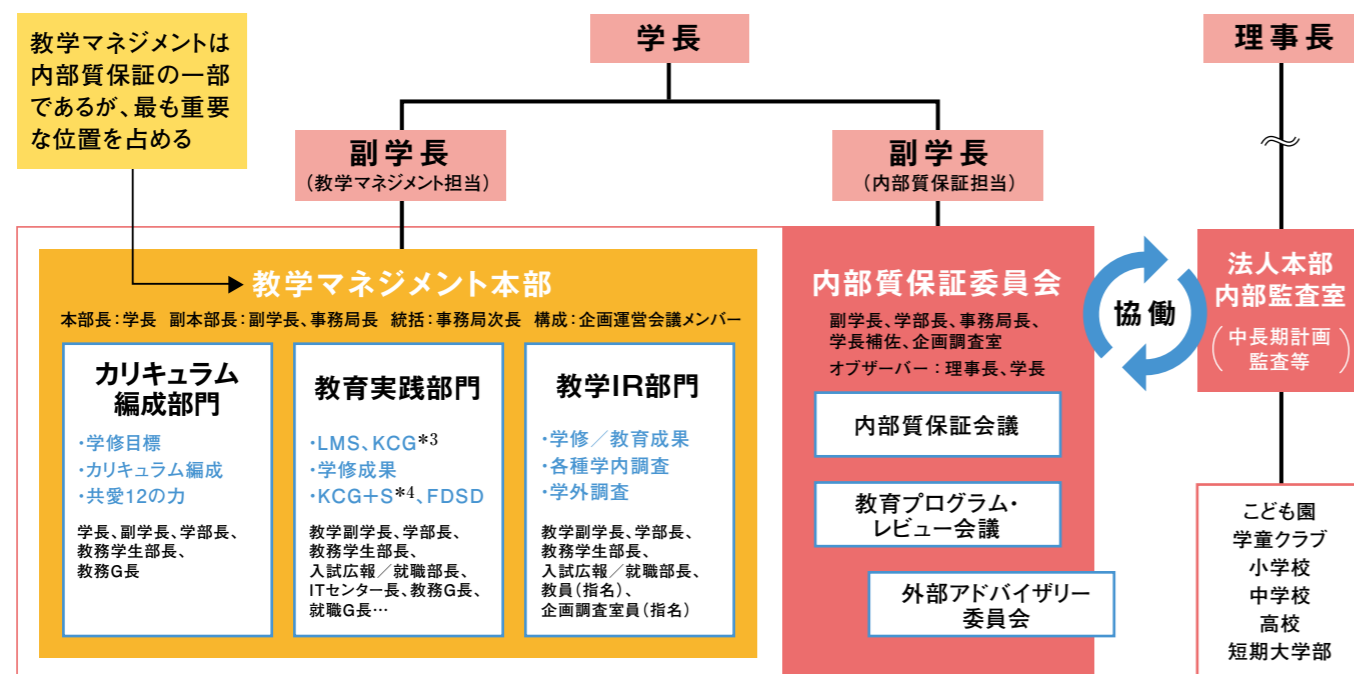


# 問/題/提/起

## 共愛学園前橋国際大学における内部質保証・教学マネジメントの体制



教職員の教育へのコミットの向上    新しい時代に向けた教育に対応しやすくなる    学生募集への好影響

### 教育投資に見合う大学であり続けるしくみ

\*大学提供資料を編集部で加工

「これが私の使命だ」という職員が現れるなど、参画意識や組織力の向上を感じます。

2つ目は、カリキュラム改革が科目の精選につながる。学生にDPを達成してもらうために、肥大化していた科目を厳選し、学生全員がカリキュラムツリーに添った学修をできるようにする必要があります。そのため、全学(本学は単科大)で480ある科目を300程度まで絞り込むことになるでしょう。その分DP達成のための共通科目を充実させたり、教員・ICTといった新しい学びへの対応が可能になります。

3つ目は、中長期的な募集力の向上です。アクティブ・ラーニング(探究学習)、教学マネジメント(カリキュラムマネジメント)など、高校の半歩先を進む大学の教育改革の成果を生かし、高校向けの教育改革支援を継続的に行った結果、高校からの信頼が高まりました。「何ができるようになるか」を重視して高校の教育改革が進むと、同じ目線で大学を探すようになります。学修・教育成果が明確な大学が選ばれるようになるでしょう。本学も学生の教育満足度が3割だった頃は定員未充足でしたが、8割を超えてから充足し、ここ数年は定員数を増やしています。

### 大学の存在意義を問う 社会の目に応えるために

やり方はそれぞれで構わないでしょう。800弱の大学に一律の方法は通用しません。委員として指針を「マニュアル」ではなく、「抛り所」としたのはそのためです。

現在参加している<sup>※2</sup>質保証システム部会では、教育再生実行会議の第12次提言も踏まえて質保証のあり方を議論しています。提言では初等中等教育に対し、データ駆動型の教育と、個別最適な学びを促しています。今は半歩先を進む大学ですが、今後、その変化についていけるでしょうか。初等中等教育や社会の価値観が変わっても教育投資に見合う大学であるには、体制を整えて終わりではなく、この先もPDCAを回しつつ、柔軟に変化し続けねばなりません。国の財政難や経済競争力の低下が続き、税金の投入先であり、人材育成機関である大学に対し、社会の目は厳しさを増しています。質保証と情報公表で応えていくしかありませんが、中でも内部質保証は、教学マネジメントがなければ成し得ません。我々の存在意義を確固とするためにも、高等教育界全体で教学マネジメントという共同作業に取り組んでいきませんか。

\*2 文部科学省中央教育審議会大学分科会質保証システム部会。2020年7月発足。P.7インタビュー記事も参照のこと  
\*3 Kyoai Career Gate、同大学のOポートフォリオ    \*4 Kyoai Career Gate + Showcase、KCGに蓄積された学修成果を、学生自身が抜粋して表示させるエビデンスベースの自己評価システム

### 教学マネジメントをめぐるいくつかの誤解

「教学マネジメント指針」で示された内容は突然降って湧いたものではなく、<sup>※1</sup>「質的転換答申」以降の教育改革における提言の集大成です。過去に唱えられた「ナンバリング」「カリキュラムマップ」等の教育をよくする取り組みを、「学修者本位の教育への転換」という理念を柱に体系立てたものだと思います。とはいえ、その「指針」が今つくられたということは、教学マネジメントとしての取り組みは緒に就いたばかりだと言えます。「指針」で確認されたのは、まさに「教学マネジメントの二丁目一番地は学修成果の可視化」だということ。そして学修成果の可視化とは、「ディプロマ・ポリシー(DP)」の達成度の可視化で、大学のあらゆる取り組みはDPを達成するために行われるということ。これらの原則を理解すると、教学マネジメントについてのいくつか

かの誤解も解けます。例えば学修成果の可視化の中心は誰か? 正解は「大学」ではなく、「学生」です。一人ひとりの学生がエビデンスと共に身に付いた力を自分の言葉で語れるようになって初めて、「学修成果が可視化された状態」になります。それらを集めてデータ化したのが、大学の「教育成果」です。これが、学修者本位を担保するうえでとても重要です。教学マネジメントは第一義的には学生のためになさねばならぬことです。また、教学マネジメントはIRや教員だけの仕事ではありません。なぜなら入試、教務、キャリア...と全部署の取り組みの最終的な成果がDP達成だからです。その意味でFDなども、単に授業技法を高めることではなく、DP達成のための人材育成が目的となります。本学は既存のカリキュラムマップがDP達成に結びついていなかったことに気づき、全部署の力を結集して大規模なカリキュラム改革を行っているところです。

### 大学経営に不可欠な 組織力、教育力、募集力向上

このように学生のためになさねばならぬ教学マネジメントは、同時に大学経営にとっても大事な取り組みです。大学という教育機関の経営を支えているのは学費です。その対価が、4年間で得られる力(学修成果)です。つまり教学マネジメントは、教育投資に見合う大学であり続けるための活動なのです。うまくいっていない大学は投資先とならない、つまり学生が集まらない。経営とは不可分です。特にコロナ禍が大学選びの価値観を多様化させている現在、立地や知名度、偏差値ではなく、身に付く力を選択軸にする高校生が増えています。地方大学や知名度

に劣る大学にとって教学マネジメントは、高校生の注目を集める一手にもなり得るのです。

教学マネジメントに取り組む中で、私が実感している経営上のメリットは3つあります。1つ目は、そのプロセスに全部局を巻き込むことにより、大学に対する教職員のコミットが強まること。本学でも今、改革案を徹底的に議論していますが、「学生のこの力を伸ば



共愛学園前橋国際大学 学長  
**大森 昭生**  
おもしろいき ●東北学院大学大学院文学研究科博士前期課程修了。1996年共愛学園に着任。2016年より現職。教学マネジメント指針を作成した特別委員会の臨時委員(第9期)、専門委員(第10期)を務めた他、現在は、中教審大学分科会、同質保証システム部会、内閣官房地方創生に資する魅力ある地方大学の実現に向けた検討会議、日本高等教育評価機構大学評価判定委員会等の委員を務める。

\*1 文部科学省中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(2012年)

取材・文/児山雄介 撮影/亀井宏昭